



大雪山のことなら何でも知らないことはない、と思えるほど。いわば旭岳の生き字引。「どうしてここが勇駒別という名になったか知ってるかい? アイヌ語で『お湯に向かう川』っていうんだ。どこからでもお湯がいつぱいにわいているからね」。こんな話を聞きながら泊まる宿は、とても心がウキウキ、豊かな気持ちになれそう。家族連れで、あるいはちょっといっぱい傾けながら…。そんな夜長のひとときもまたおつなもの。



「若い時は隣のしらかば荘に宿泊して、冬になると通い詰めて来たもんさ」。大雪山の魅力に取り付かれ、旭岳ロープウエーが開通した当初の1968(昭和43)年当時、既に鶴川町から旭岳に通い詰めていた山男は、今やなくてはならない「旭岳の主」。

旭岳温泉では今年、「アースデー」(地球のことを考え行動する日)にちなんで、6月下旬、青少年キャンプ場を会場に、春菜さんやNPO(非営利活動)法人ねおすの皆さんが講師やイベントナーになって、1週間日替わりのミニイベントを開きました。火の起し方、まき割り、ザリガニ採り、そしてダッチオーブンを使ったアウトドア料理の数々。くん製、雑炊、野菜スープ作り、パン作りなど、キャンプ定番の料理メニューが次々。そして春菜さんは、地元のアイヌ語地名の由来などを分かりやすく話す「語りべ」でした。

◇ ロッジ「ヌタブカウシベ」は、登山やスキー愛好家、クロスカン

トリースキーの国内強化合宿の常宿などとして年中賑わいが絶えません。この日はちょうど元札幌交響楽団員のご主人と声楽家の奥さんが夏山トレッキングに来ていました。

持参のリコーダーでさっそく即席トリオの演奏会。木管の温かい響きが広がりました。「オレさあ、楽器が好きだから」というように、無造作に置いてあるピアノ、シロフォン、ラッパ、コルネット、リコーダー、ギターがいつも出番を待っています。

「スイスでリコーダーを買った時、こんなむさくるしい格好だから、楽器を買いに来たと思われなかったこともあったよ」。

11月から5月、温泉街は長い冬の期間。そのシーズン一番乗りは、クロスカントリースキー選手の内強化合宿です。約8ヶ所の林間コースの整備は、隣の白樺荘ご主人、神林知宏さんと2人で、何年間も苦勞して整備を続けてきました。その成果が多くの国内クロスカントリー選手たちの合宿地として評価につながっています。

春菜さんのお話会(旭岳温泉青少年野営場)



「アースデー」イベント 火おこし



「アースデー」イベント 春菜さんがまき割りのお手本を披露



ロッジ「ヌタブカウシベ」



「アースデー」イベント ダッチオーブンでくん製作り

はるな ひでのり 春菜 秀則さん/ロッジ・ヌタブカウシベ経営/旭岳温泉 ☎97-2150 胆振管内鶴川町出身、60歳。道立苫小牧東高校卒。山登り、スキーが好きで、年間を通して何度となくこの地を訪れているうち、廃業した旧山水食堂店舗が売りに出ていることを知って購入。1979(昭和54)年、ラーメン店「ヌタブカウシベ」を開業して30周年。温泉街から1.2km上方の山中で新たな自然湧出の温泉源を発見し、1989(平成元)年、旧店舗を頑丈なログハウスの宿泊ロッジに建て替えて旅館経営。「ヌタブカウシベ」とは、アイヌ語で「ヌタブ・カウシベ」。「台形状の地形の上いつもいらっしゃるもの」という意味だそうです。台形とは、広大な山岳地帯。その上いつもいらっしゃるものとは、大雪山の山並みを指し、その山並みを神としてあがめているのです。つまり大雪山のことです。東川町観光協会副会長、同協会旭岳部会長。